

## 香 港 大 学

## The University of Hong Kong

香港島の西北部、眼下に海を望む山の斜面に連なる美しい建物の群、それが香港大学のキャンパスである。香港のセントラル地帯からバスで10分あまり、町の雑踏を完全に避けえた景勝の地である。そして内部のふんい気も、生き馬の眼をもぬこうという香港一般のそれとは逆に、まことに学問の府というにふさわしいおようなものである。

## I 概 観

沿革 大学の制度をきめる ordinance が発効したのが1911年3月30日、つまり今年は50周年にあたる。そのために Golden Jubilee と銘うって多彩な記念行事が予定されている。香港総督が正式に大学設立の計画を発表したのが1907年、その後、各方面から多くの有形無形の援助を受けて発展した。前身ともいべき College of Medicine があり、その発展的解消という形がとられたものであるが、それが香港大学の歴史の一部をなすものとはいいがたい。設立当時から現在に至るまで、建物施設の拡充、大学内容の充実とは別として、機構上での変革はほとんどなかった。ただ1952年に東方文化研究院(The Institute of Oriental Studies) が設置されたのは例外である。第2次大戦中に日本軍のために若干の被害を受けたという事実は日本人にとって悲しい思い出である。

性格と目的 ordinance の規定によれば、大学の設立目的は、香港における学問研究の発展、あらゆる人種国籍をもつ学生の人格の形成と発展、隣国中国とのよき関係の維持にある。しかし実際にはイギリス植民地としての香港の地位を守ってくれる中国人エリートを育成するための機関であるといえないこともない。イギリスのそのような目的はさておき、この大学は、多くの意味で日本における明治あるいは大正時代の東京帝国大学のごときのものであると考えればそのおおよその見当がつくであろう。現在では香港で唯一の大学(university)であるが、さらにもう1つ、最近3つの書院(college)が合併して大学に昇格することに決まっている。

組織 大学の組織は university ordinance によって定められ、さらに statutes によって機能体としての内容が与えられている。大学の supreme governing body は香港政庁と大学の最高首脳陣などから成る court である。学長は香港総督がこれを兼任することに定められて

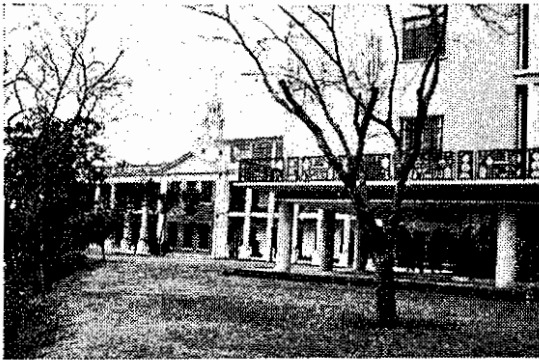
いる。教授会に当たる senate は教育および研究に関する責任を負うが、その財政的裏付けは council がこれを行なう。この制度は理想的なものとして大学関係者全体から歓迎されているようである。

財政 学生の授業料、政庁の grant、および外部からの寄付がその財源である。政庁から与えられる annual grant は150万香港ドル(約1億円)、その他建物の増築などに際して capital grant が与えられる。外部からの寄付は Endowment Fund の中に入れ、適宜支出される。これらの中にはイギリス本国政府およびロックフェラー基金からの寄付などがあり、古くは義和団事件の賠償金からの grant、最近では戦後没収された旧日本財産の売却によって得た100万ポンドの grant も含まれている。大学の財政は香港の地位と共に安泰である。

学生 学生はすべてすさまじい競争にたえぬいた最後の勝利者であり、しかも将来ホワイトカラーのエリートとしてその地位を約束されている「学士様」の卵である。そのうえ、この大学では学生の経済的負担が非常に大きいために学生がそれにたえる家庭の出身者であるという要素が加わり、独特の気風がある。休暇期間は日本の大学に劣らず長い、開講期間中は猛勉強を要求される。ただ特筆すべきことは、大学が学問の府であるばかりでなく、文化活動やレクリエーションがさかんで、学生生活のすべてが学内でエンジョイできるようになっていることである。教官も積極的にそれに参加する。学生の質がよいこと、大学の学問の水準が香港の他の諸学校に比べてはるかに高いこと、人格の形成に役立つこのような制度の存在などのために、たしかにエリートというにふさわしい青年達がここを巣立って社会に出ていくこととなる。学生数は1200人あまり、約4分の1が女性である。また全学生の約半数が Faculty of Arts に属する。

## II 講 座

大学は4つの学部をもつ。すなわち Faculty of Arts, Faculty of Science, Faculty of Medicine, および Faculty of Engineering and Architecture であり、それぞれ大学院の制度をもつ(博士制度の有無は学部によって異なり、Faculty of Arts にはない)。undergraduate のコースは一般に3年、ただ Architecture と Medicine は5年である。



Faculty of Arts には 8 つの Department がある。すなわち Dept. of English, Dept. of Chinese, Dept. of History, Dept. of Economics and Political Science, Dept. of Geography and Geology, Dept. of Philosophy, Dept. of Modern Language, および Dept. of Education である。現代アジアの政治および経済に関する講座ならびに研究者は、ほとんどみな Dept. of Economics and Political Science に属している。講義は全学を通じて英語で行なわれるが、Dept. of Chinese のみは例外で中国語で行なわれる。(ここでは他の Faculty についてはふれないことにする)。

このほか大学内の重要な機関に、東方文化研究院、図書館、出版局、Dept. of Extra-Mural Studies がある。東方文化研究院は1952年に設立された。事実上 Chinese Dept. の大学院としての役割を果たし、また外国からくる中国語および中国文学の研究者の受け入れ機関となっている。院長は考古学者の F. S. Drake である。*Journal of Oriental Studies* という雑誌を出しているが、内容的には中国の古典文学に関するものが大部分を占める。この institute の特徴は、その組織の一部として Language School なるものをもっていることである。大学の内外から学生を募るが、学生は半年間のコースを終えたと相当複雑なディスカッションが自由にできるようになる。毎日4時間、それも生徒1人に先生1人という方法でつめこむ。

図書館は2つの部分に分かれている。General Library と称する英文のそれは大学の main building の中であって10万冊あまりの蔵書を持ち、1300種の雑誌をとっている。書棚はすべて open-access になっていて、貸し出しは学生が3冊、スタッフは6冊を限度とし、期間は前者が2週間、後者は1カ月である。アジア関係の書籍、雑誌はひろく網羅されているとはいえないが、割合そろっているようである。このほか Hankow Collection,

Morrison Collection というのが取められている。

馮文山と称する中文書の図書館は独立の建物の中にあつて、11万5000冊の蔵書を持ち、115種の雑誌をとっている。中国の古書が多く、新中国の資料は皆無に等しい。今年9月に新しい図書館の建物が完成する予定で、その晩には以上の両者がそこへ引っ越すこととなる。

Dept. of Extra-Mural Studies は1957年に設置された。内外から聴講者を募って1週1回または2回、2～6カ月の連続講義が行なわれる。専属の講師はなく内外に人を求める。内容はきわめて専門的で水準は高いようである。言語のコースもあるがあまり効果はないようだ。

出版局は毎年数十冊の書籍雑誌を出版しており、香港大学のスタッフの著書はこれによって容易に出版のチャンスを与えられる。オックスフォード大学の出版局と特別の協定を結んでいる。

### III アジア研究

なんらかのプロジェクトを共同で研究するという組織はないし、また実際に行なわれたこともないようである。以下に研究者の顔ぶれをみると、Dept. of Economics and Political Science の Professor であり、日本になじみの深い E. S. Kirby が、おもに中国の研究に専念している。中国を含めたアジア全般について多くの著書および論文をもつ E. F. Szczepanik は同 Dept. の Senior Lecturer であり、また香港経済に関する権威でもある。そのほか Ronald Hsia, S. S. Hsueh, S. G. Davies などがいる。このほか外国から中国研究などの目的で香港にきている若い研究者がいる。日本にもいたことのある K. H. Pringsheim などである。それらが毎週1回開かれる同 Dept. の大学院セミナーにおいて一堂に会する。同 Dept. が中心となって組織した Contemporary China Seminar は、大学外部の研究者をも組織するためにつくられたものである。毎月1回大学でセミナーを開き、その機関紙 *Contemporary China* はすでに3号まででている。

このほか香港大学には Institute of Modern Asian Studies がある。現在は完全に有名無実であるが、今後本格的な体制を作りあげようという計画が目下関係者の間で進行中であり、将来の発展が期待される。

(付記) 本年9月に Symposium on Economic and Social Problems of the Far East なる学会が、大学の50周年を記念して開催される。外国から多くの学者が参加する予定である。

(アジア経済研究所香港派遣員 尾上悦三)